

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： グループホーム おからぎ

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391300043		
法人名	社会福祉法人いつつ星会		
事業所名	グループホーム おからぎ		
所在地	〒028-6105 岩手県二戸市堀野字大川原毛89-12		
自己評価作成日	令和4年11月25日	評価結果市町村受理日	令和5年3月8日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自宅と同様に生活の場としてゆったりとした雰囲気の中で、自分らしい生活リズムに沿った過ごし方が出来るような支援心がけている。生活の中に自分なりの日課や役割を持っていただくことで、生活にメリハリを持たせ、五感で季節を感じる事が出来る何気ない日常の幸せな日々を、豊かで穏やかに送れるように支援を行っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は周辺に事務所・薬局・店舗が、近接して総合病院があり、同法人のデイサービスが隣接する開設12年目のグループホームである。運営する法人は、養護老人ホーム、特養、訪問介護、通所介護、短期入所の多様な事業を展開している。法人の経営理念にある「歌い・踊り・泣き・笑い・愛し・生きる」を基礎に、事業所は利用者へ寄り添い敬う介護に努め、認知症と共に生きる人の心理を理解し、個人の価値を高める行為を熟考しながら、「尊厳の意識を高め穏やかに過ごせるケア」、「安心して暮らせること」、「体調管理と健康増進」を職員間で共有している。職員4名が介護支援専門員資格を有し、他の職員も経験豊かで質の高い職員集団である。季節に応じ紫陽花・ダリア・菊・レモン・りんご等を浴槽に浮かべ、五感で季節を感じられる工夫をし、入浴を嫌う人はいない。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年1月18日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新人研修時や、毎年法人内で理念の研修を行っている。当事業所では、玄関とホール内に理念を掲示し、意識継続に努めている。	法人経営理念や経営方針のもと、年度ごとに事業所としての目標を掲げ取り組んでいる。今年度の事業所目標は「尊厳の意識を高め穏やかに過ごせるケア」「安心して暮らせること」「体調管理と健康増進」の三本柱とし、職員間で共有し日々のケアにつなげている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	近隣のお店で食材を購入したり、出前やケーキ、弁当等の注文を依頼している。又、市内の専門店から、牛乳等の乳製品の配達をお願いしている。今年も、入居者と一緒の買い物や、地域行事の参加や見学を中止とした。	地域との関りは近隣商店とのつながりが中心である。自治会に加入し回覧板等も回ってきている。地域との交流を深めるため、自治会が開催する文化祭への作品出展なども検討していきたいと考えている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	グループホームの待機者がいる状態で、申込者に対して自施設以外の地域サービス等の相談にのっている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は、運営推進会議を開催できていない。書面を添付している。	運営推進委員は、利用者、家族、広域行政、市役所職員、民生委員、福祉有識者で構成されている。今年度は書面開催のみとなっている。委員からの意見や提案は特に出していない。	事業所の運営等に対する意見や提案を委員から出してもらえるような会議資料作りや、他行事との抱き合わせ開催、ゲスト委員の選定など、会議のあり方について検討していくことを期待したい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	社会福祉協議会や地域包括支援センターに連絡を取り、在宅状況やGHの待機者の現状を報告している。今年も運営推進会議を開催しておらず、普段の連絡は電話で行っている。	社会福祉協議会や地域包括支援センターと待機者情報を含む各種情報交換を行っている。ケアマネジャーが窓口となり市福祉課等と連携を図っている。防災ラジオで災害情報が届き、各種行政情報は法人本部を通して把握している。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	GH業務会議で3ヶ月に一度、身体拘束の勉強会を行い意識の徹底を図っている。身体拘束に繋がるケースはないが、玄関の高所にセンサーを設置しエスケープに対応している。又、スピーチロックを念頭に置き、入居者との良好な関係の構築や周辺症状の軽減に努めている。基本的には身体拘束をしない事を契約書に謳っている。	身体拘束廃止の指針や、法人の身体拘束等行動対応マニュアルに沿って、業務会議の際に3ヵ月毎に研修会を開催している。既存の身体拘束等行動対応マニュアルの読み合わせを行い、禁止の対象となる行為の正しい理解に努めている。スピーチロックについては、日常的に職員間でフォローし合い望ましい対応を心がけている。	事業所の「身体拘束廃止の指針」と法人の「身体拘束等行動対応マニュアル」について、内容の見直しや検討を行い、実態に即応できるよう精査することを期待したい。指針・マニュアルには施行日(更新日)の記入が望ましい。	

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	事業所内で研修を実施している。各職員が虐待防止の意識をもって業務を遂行している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	事業所内で研修を実施している。現在は事業所自体には、制度対象者はいない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に施設見学をして頂いている。概要説明等についても十分な時間を取り、納得が得られるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	普段の入居者との何気ない会話の中から、食事等の希望を取り入れている。家族と連絡を取った時には、情報を共有しやすいように記録用紙に印をつけている。日頃の様子を伝え、希望を確認している。	コロナ禍で家族との接触は通院同行のため来所する際に限られる。ホームでの様子を写真等で家族へ伝え、家族の意見の把握に努めている。利用者の意見を反映させるため、職員は利用者と毎日会話することを優先に介護にあたっている。「季節のものを食べたい」「新聞が読みたい」などの利用者からの意見は、実行できるものは即時に実行するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度、業務会議を行い、意見交換を行っている。急を要する時は、随時意見を聞き他スタッフに周知様子を見ている。又、職員アンケートや人事考課で意見を聞き、人事や運営等の参考にしてている。	職員の提案で居室内での立ち上がり時の転倒防止のため、寝具をベットから布団に替えた。また、共有スペースの居間のテーブルの配置も利用者の動線に合わせ皆が居心地よく入れるよう、微調整を行っている。職員の日常の細やかな目配りや気配りを運営に反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的に職員にアンケートや面談を行い、意向を確認している。人事考課を実施している。		

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	グループホームケアに必要な、認知症や虐待等の項目に対しての勉強会を開催している。外部研修は行えていない。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	日本認知症GH協会と、いわて地域密着サービス協会に加盟し、資料や機関誌を参考にしている。定例会や研修会には参加できていない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居決定時から、各情報を収集しアセスメントを行い、支援に繋げている。特に言葉遣いに注意し、傾聴の姿勢を心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の不安や要望を聞き、安心してサービス利用を開始できるように支援している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所申し込み時に、既往歴等から本人の状態をアセスメントし、サービスの検討を行っている。ケースにより、各関係機関と連携を図っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の意向を尊重した支援を心がけている。本人の出来る事を探したり、行ったりして暮らしを共有できるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が通院対応で来所の際には、近況を伝え連携できるように支援を行っている。家族への報告や相談を行い、繋がりを大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の中、面会等従来通りに行われていない。しかし、受診の際に家族と昼食を摂ったり、年賀状や近況報告のハガキが送られて来る方もいる。	入居時に専用の様式に従って利用者についての情報の収集を行ない、入居してからも関わりを持つことで知り得たことを記録として追加している。以前はあった隣接のデイサービス利用者との交流は、コロナ禍により現在は思うように行われていない。定期的に訪問理容に来る理容師は、入居後の新たな馴染みの関係構築に寄与してくれている。一番の馴染みである家族との面会もままならない状態が続いているが、通院時の家族同行が唯一の機会となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	本人の能力を把握しながら、出来る事は皆と一緒に出来るように支援している。入居者同士の支え合いを大切に、なるべく周囲との関りを持つようにしている。孤立しがちな方には、得意な事を行っていけるように職員が関わっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在は行えていない。今後の課題である。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分の希望や意向を、言葉にできる入居者は少なくなっている。日々の生活を観察しながら、職員間で情報を共有し支援に繋げるようにしている。	言語コミュニケーションを取れる方も多いが、思いを伝えられない場合もある。職員は、考えながら「見る」、思いを巡らせながら「聴く」、職員自身のこととして「感じる」ことを通じ、自らの感性を磨きながら、利用者に寄り添い、思いや意向の把握に努めている。職員間では申し送りノートに小さな気付きも書き記し、共有を図っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族に生活等について伺ったり、前担当ケアマネジャーから情報を収集している。その人の生活歴を参考に、必要に応じてケアプランを見直し、経過の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の言動を観察しながら、記録をもとに職員間で共有し、経過の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	スタッフの良好な関係を基本として、本人の意向や生活状況をアセスメントし、ケアプランを実施している。各担当スタッフはケアプラン評価表を記入し、毎月の業務会議で報告してケアプラン作成の参考にしている。	毎月、利用者全員について、それぞれの居室担当作成の評価表を基礎にモニタリングを行なっている。その上で、基本的には6ヵ月毎に介護計画を見直している。毎月のモニタリングは、職員の見方(小さな気付き、利用者の意欲も意識して見ている。)、考え方を「リセット」する効果も期待して行なっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各個別のチャートに24時間の流れで記録している。申し送りノートで支援内容を共有している。又、ヒヤリハット用紙を併せて活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の意向に沿った関りが出来るように、必要に応じた企画、支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	通院時に必要な時は、地元の介護タクシーを使用している。今年も買い物、祭り見学、感謝祭の行事への参加は行えていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からの主治医との関係を維持し、医療を受けられるように支援している。その都度、状態に応じた内容を報告し、支持をもらっている。希望がある場合は、近くの県立二戸病院に変更している。	入居前からのかかりつけ医に、家族同行で受診している。必要に応じ血圧手帳等の情報を医療機関へ提供している。隣接のデイサービスを兼務する看護師は、利用者の健康観察や服薬管理、簡単な処置等の日常の医療関連業務を担っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	隣接の通所介護施設の看護師に、入居者の既往歴や内服薬、主治医を伝え把握している。急変時には支持を仰ぐことが出来る。		

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	隣接する県立二戸病院と、協力関係にある。入退院時にはカンファレンスに参加している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に向けた指針を作成している。指針や、状態変化の意向確認書を家族に説明している。事業所の勉強会で重度化や、ターミナルケアの研修を取り入れている。	入居時に重度化した場合の対応について利用者・家族に説明し同意を得ている。介護度が高くなった場合、特別養護老人ホームへの入所申請を勧めている。中には医療行為を要する間際まで事業所で介護する場合もある。重度化・ターミナルケアの研修を行っているが、医療・看護との連携体制の実情から看取りは行っていない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	各種急変時(発熱、嘔吐、痙攣、転倒、吐血、骨折、意識障害)のマニュアルを作成している。隣接するデイサービスの看護師に随時、相談、指導を受ける体制にある。定期的な訓練は行っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災時の昼夜を想定した避難訓練を行っている。夜間訓練では、消防署の助言を取り入れた訓練を行っている。食材、反射式ストーブ、発電機、災害時備品等を備蓄している。地域に民家が少なく、協力体制は築けていない。	ハザードマップ上の危険は、土砂崩壊と把握している。平屋で車椅子用のスロープも整備され、消防署も数分の場所と近接している。消防署の助言もあり、利用者の避難は玄関ホールまでとしている。夜間想定訓練も実施しているが、夜間や薄暮時の訓練までには至っていない。訓練実施にあたっては危険事項等を確認することにも留意したいとしている。1週間ほどの食糧と飲料水を備えているが、夜間避難等を想定したヘッドライト等の必要物品の常備を検討している。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	事業所内で個人情報、プライバシーの研修を実施している。個人の姿勢を大切に、各自に合った声掛けを心掛けている。入居者の尊厳を傷つけないように注意し、ケアを行っている。	「自分らしさ」を基軸として利用者に関わっている。利用者の生きてきた時代背景を理解できる職員が多く、当時の話題を持ち出すと、利用者の表情が目に見えて変わるといふ。羞恥心への配慮として、入浴時の同性介助か否かの確認を行っている。個人情報は、あからさまに目に触れることの無いよう保管している。	
----	------	--	--	---	--

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望や思いを、達成できるようなケアを心がけている。話しやすい環境や雰囲気作りに努め、自己決定ができるように選択しを増やしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な流れはあるが、入居者がしたいように寄り添うように支援している。現在は食器拭きや洗濯たたみ、新聞整理等の役割を持っていただき、個々のペースに合わせている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に、理髪店の訪問散髪を依頼している。数名の入居者は、自分でブラッシングを行っている。化粧品や衣類等、入居者との一緒に買い物は行えていない。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の移り変わりや日々の会話の中で、入居者の嗜好を把握し、季節を感じられるメニューを取り入れている。一部の食器洗いや食器拭きは、入居者中心に行っている。	季節の食材を活用するなど工夫した食事を提供し、喜ばれている。献立は職員が立て、利用者との会話の中から嗜好を聞き出し作成している。食材は配達・買い出しにより準備している。季節ごとの行事食や、お盆・敬老会・正月には仕出し弁当の外注もしている。ホットケーキ、へちよこ団子等の手作りおやつも、月に1回はやれるようにしている。利用者には、食材の下ごしらえ(絹さやの筋取り、食用菊むしり)、食器拭き、テーブル拭きなど、可能な範囲で手伝ってもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分摂取状況を把握しながら、排泄状況や体重管理を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の清潔保持のため、食後の声掛けやケアを行っている。就寝前の口腔ケアを入念に行っている。		

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	基本的には布パンツ、リハビリパンツとパットを使用している。トイレで排泄することを意識して、本人の排泄パターンに応じたタイミングで、声掛けや介助を行っている。	現在の状態維持を目標に、排泄パターンを参考とし、見守り・声がけ・誘導で利用者の表情や仕草を見ながら介助している。布パンツ使用が4名で、他はリハビリパンツにパットを併用している。ポータブルトイレ利用者はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事摂取量、水分摂取量、活動性を意識した支援を行っている。ヨーグルト等の乳製品や寒天ゼリーを提供している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に週二回、13:30~16:00頃に入浴している。月ごとに季節に応じた花や、植物を浴槽に入れて入浴を楽しんでいる。	週に2回の入浴を基本とし、午後の時間帯に行っている。入浴を嫌がる利用者はおらず、一人30分程かけてゆっくりと入浴を楽しんでいる。浴槽に植物(紫陽花、芍薬、菊、ダリア、レモン、りんご、生姜、ハーブ、大根等)を浮かべ、視覚でも入浴を楽しむことができるようにしている。利用者に好評である。また入浴の時間は利用者職員との格好のコミュニケーションの場・時間でもあり、大切にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	余暇時間は、本人の生活リズムや体調に応じて、居室やホール内のソファ席で休んでいただくようにしている。夜間は、本人の就寝時間に合わせるようにしている。ホールや居室の空調を調整し、入眠しやすい環境作りをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方箋を管理しながら、日々の状態観察と支援の注意点に留意しながらケアを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の好み、やりたい事等を尊重し、物品や場の提供を行っている。音楽やテレビを楽しんだり、食器洗い、拭き、洗濯たたみ、おしぼり巻等の家事活動を分担している。		

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近場の散歩や、景色を楽しむドライブには出かけたが、夏以降はドライブは行わなかった。入居者と一緒の買い物支援は行えていない。	日常的な散歩を行っている。春から初夏にかけて、花見や新緑を観にドライブができた。家族と通院の時には寄り道をして食事をしてきたりしている。コロナで様々な行動制限がある中ではあるが、タイミングを見計らいながら、外出支援の内容を充実させたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には、事務所で管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時に対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	十分な広さを取り、思い出の音楽や好みの映像を流し、ゆったりと過ごせるようにしている。季節の花や飾りつけを行い、季節感を演出するようにしている。又、窓越しに見えてくる季節の風景に、会話を広げている。	居間には、観葉植物、空気清浄機能付加湿器が2台置かれ、壁面に数字の大きなカレンダーや千羽鶴が飾られている。窓が大きく外の景色もよく見え、話のタネになっている。利用者の好みに合わせた音楽やテレビを利用し、相性を考慮した席配置など居心地の良い工夫を図っている。利用者の殆どが日中居間で思い思いに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホール内にあるテレビ前のソファ席と、食堂のテーブル席で気の合った入居者がそれぞれの場所で過ごしている。又、玄関側のソファ席で一人で過ごしたり、テラスに椅子を置き、そこで花や景色を眺めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が自宅で使用していた衣装ケースや食器類、食器等を持って来ていただき、落ち着いた環境になるように支援している。現在は、居室にテレビを置いている入居者はいない。	ベッド・クローゼット・洗面台が備えられ、温度・湿度はエアコンと加湿器で快適に調整されている。利用者は、家族写真や位牌、使い慣れた小物を持ち込み、居心地よく過ごせる居室にしている。ご飯茶わんやお箸は本人が気に入ったものを用意している。	

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おからぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	屋内はバリアフリーになっており、移動に支障がないようにしている。トイレは三箇所設置しており、安心できる環境である。トイレを使用していない時は、ドアを半分程開け、使用していない事が分かるようにしている。		